

「誘われたから」、「しようがないから」と来るんだったら、来ない方がいゝですよ、本当は——。

自分がここに来て、何かこう一つでも自分というものに、大事なものを受け取って帰らなくてはいけないと、そうであるならば、話をする私の方も良いですけどもね。これは何処に行つて話をしても一緒ですね。

一三三、悟りは毎日の生活の中に

皆さんも、高橋信次先生の本を読んでいらつしやる方は分かつておられると思いますが、お釈迦さんという方は、二九歳の時に自分の城を飛び出した訳ですね。

何故、飛び出したかと言いますと、自分の生活環境と自分以外の環境を見て、

「人間というのは、何故、こんなにも不平等なんだろう。何かあるのではないかと疑問を持った訳ですね。」

城の王子だった訳ですね。自分は継母に育てられた。いろんなものがあつた訳です。しかし、それから数年後、お釈迦さんが悟られる時に、パピラス・マラーという魔王が出て来て、

「おまえは、そういう事は止める。止めたらおまえに、世界中のあらゆるものが従う力を与える。おまえは城に帰って面白可笑しくやった方がいゝではないか」

——その通りですねえ。お釈迦さんもその時、フツと、その言葉に引つ張られそうになつた。しかし、そこはお釈迦さんだ——。お釈迦さんは、魔が言っている事を見破つた訳ですよ。

お釈迦さんは、出家してその後、疑問を追求していった訳ですね。そういう中で、もういろんな処の修行所を歩いたんですね。先ず最初に行ったのは、アララ・カラーマという仙人の処に行つて修行したけれども、分からない。他にもいろいろ行つてみたけれど、誰も本当に分かるような人がいなかったんですね。

それで、ピパラ（菩提樹）の木の下で、今度は自分で禅定を始めたんですね、六年間——。六年間座つていたんですね。

しかし、座すわっていても、これでは分からないんだということに気が付いた訳です。そして六年目の十二月に、ネランジヤラ川に行つて、沐浴みよくしていたんですね。水浴みずゆびをした。

そうしたら、村むらの娘むすめが歌うたを歌うたっているのが聴こえてきた、

「♪弦げんの音ねは、強つよく締めれば切きれてしまう、弱よわけりや音色ねいろが悪い。弦げんの音ねは中程なかほどに締しめて音色ねいろが良い。弦げんの音ねに合あわせて、踊おどろよ、踊おどれ……」

というのが――。

それを聴いた時に、お釈迦さんはハツとして、

「あつ！ 中程なかほどという、中道ちゆうどうというものが大事なのだ。両極端りょうきょくたんになつてはいけないんだ。私が長い間、求もとめていたのはこれだったのだ」

という事を悟さとり、そしてその中道ちゆうどうというものを、しっかりと心に入れて、もう一度自分で禪定ぜんじやうしていった訳です。

しかし、このネランジヤラ川で聴いたその歌は、実は自分が城にいた時に、お酒さけを飲のみみながら歌い、それから自分の取り巻きの女官じよかんに歌うたわせていた歌――これはもう、

自分も歌っていた歌だった訳ですね。それに自分が気が付かなかった訳ですよ。

私は高橋先生の本『人間・釈迦』を読んでいった時に、何となくこういう事に気が付いた訳ですよ。最初はそう思っていた訳です。

しかし、次に読んでも気が付かない。三回、四回、五回読むうちに、「あつ、この歌というものは、お釈迦さんはこれで悟られたかもしれないけども、高橋先生の書いたのは意味が違う。確かにその意味もあるかもしれない。しかしそれは、

「やはり、私達人間は多くの人に対して、やらなければいけない事が、自分が毎日やっている中に必ずあるんですよ。そういう事をよく振り返っていかなくてははいけませんよ」

――あの話の中は、そういう事を教えていることなんですね。私はそういうふうを受け取った訳です。

そして自分を振り返つたら、確かにそうなんです。難むずかしい事じゃないんですね。毎日、自分が言葉ことばに出いし、行こう為いをし、そして心の中に波動はどうが起きて、振しんどう動どうが起きて、もう自分が振り回されるような事が毎日の中にある。

それは今言いましたように、中道というものを忘れている事が沢山あるからじゃないでしょうか。

やはりそのように、高橋先生の本でも読み方によつては全然違ってくるんですよ。「あつ、これは私に話をしてくれているんだ」ということが分からなくてはいけないですね。

そしてお釈迦さんという方は、六年目にその事が分かつて、それから二日間の間、禪定ぜんじょうをしていった。自分というものを振り返っていった。

その間に、いろんな事が出て来て、それでいろんな事が分かるようになった訳です。そして、アポロキティシュバラー（インドの当時の悟られた方の呼び名／古代のギリシャ語でアポロンの悟りの意）＝観自在菩薩くわんじざいぼさつ、即ち仏ほとけさんになったんですね……。我々は死んだら「仏さんになる」なんて言いますが、仏さんにはなれないんですよ。お釈迦さんは、本当に悟り、仏さんになった。それからみんなに話をするようになったんですね。

そして、お釈迦さんは約四五年間、住む処すむところが無かった訳ですよ。何故かと言いま

すと、あつちに行き、こつちに行きして、そして話をして歩いた訳です。

そして話をしている途中で、身体からだを壊して八一歳で亡くなったんですね。

お釈迦さんもやはり、肉体を持てば私達と生活は一緒なんですね。

ところが、お釈迦さんのような方は、自分の目の前に出て来るもの——これが我々とは全然違う大変な事が、沢山出て来る訳ですよ。そういうものを、自分で一所懸命いそけいめい乗り越えて、乗り越えたものをみんなに話をして、「人間とはこうなんですよ」という事を話はなをされていた。

そしてお釈迦さんは、自分が生まれて死ぬまでの事だけではなくて、前の事かこ（過去世の事）も全部知っている訳ですからね。そういうものを紐解ひもといて話をされた訳です。

その中には、我々に伝わっている阿弥陀経あみだきょうがありますね。阿弥陀さんの話は、阿弥陀浄土あみだじょうど——あれも実は、法然ほうねんという人の話ではないんですよ。あれはお釈迦さんが話された事ですね。

そのように、大聖者だいせいじや＝釈迦如来じやくかにらみは、こうして四五年間、自分の住む処も無く、あつち歩き、こつちに歩きして話をして歩いた。昔は自動車じどうしゃは無かった訳ですからね、

お弟子さんを連れて、テクテク……歩いていた訳ですよ。

そして未だに、その教えは残っている。それは神理（絶対の理の意）だから残っている訳ですよ。お釈迦さんの教えは、いろんなものが残っていて、今は何か、一寸曲がってきたけれども、しかし、正しいもの、立派な事はちゃんと書いてありますよね。

それが私達の処に、今伝わって来ている訳です。——東洋の思想ですよね。私達はそういう話を少しでも聴いている訳ですよ。

お寺さんでも、まあ、曲がりなりに本を読んできたりして説教はしていますね。

今度は、それを聴いた人はどうしてるかというところ、「今日は、説教聴きに来ましたが、良い話でした」で、終わってしまう。

みんな数珠を持って来ていますけど、数珠は何の為にあるんでしょうか？——分らない。みんな下げているだけです。アクセサリー？——それじゃしようがないですね。あの数珠であっても、お釈迦さんの当時からあるんですね。あれはバラモン教が使ってたんですね。経文みたいなのを上げる時に、一回、二回と数える為のものです。こうやって、ジャリ／＼やる為にあるんじゃないですよ。「えいっ！」

てやる為にあるんじゃないですよ。（笑）

やはり伝わっている中にあります御灯明だつてそうでしょう。御灯明を上げて、線香を上げて、あれでどうするんですか——。亡くなった人を供養する為にある？

——冗談じゃありませんよ。あれは、お釈迦さんが説法される時に、真っ暗だから油で灯りをズツと点けた訳ですよ。

お線香は、お釈迦さんのお弟子に、プルナ・ヤニプトラーという利口な人がいて造ったんですね。当時は、もうみんな臭くてしょうがない訳ですよ。食べ物や、体にいいろんな虫除けの為の木の汁を塗っているから臭いんですね。それではお釈迦さんに失礼だから、線香を考え出した訳ですよ。木を材料にいろんなのを造ったのが、線香の始まりなんです。仏さんを、亡くなった人を供養する為じゃないんですよ。

そうしたら今度は、御灯明を上げるから夏でしたら虫が飛んで来ますね。冬でも飛んで来ますけど、昔は蚊帳も網戸もなかった。今みたいに部屋を閉めてクーラーを掛けられない訳ですから、その灯りに虫が飛び込んで、みんな死んでしまう訳です。

お釈迦さんは、説法があった次の日の朝早く、お弟子さんもまだ寝ているうちに起

き上がって出掛けるんですね。

「何をされるのだろう」と、お弟子さんが見ていた。

そうしたら、自分が前の晩ばんに説法した処をズーツと回る訳ですよ。

「何故、回られるのだろう」と見ていたら、その灯あかりに集あつまった虫が、火に飛び込んで死んでしまうんですね。その虫を吊とつていらした訳ですよ。

お釈迦さんでさえ、そういう事をちゃんとしていらつしやる訳ですよ。

そういうものを見ていると、その辺にいる虫も踏ふむ訳にいかなくなってきましたね。

虫でも魂たましいがある。植物しよくぶつにも、実はある訳ですよ。話もする。

——次回に続く

次回『二四、植物の精せい——人間の心を知っている草木や花達』の更新予定は、6月の第4週です。

どうぞお楽しみに。